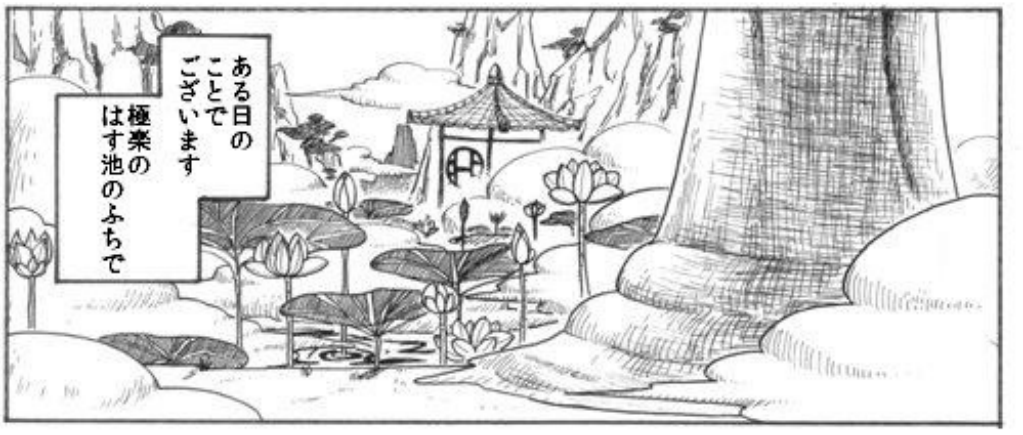
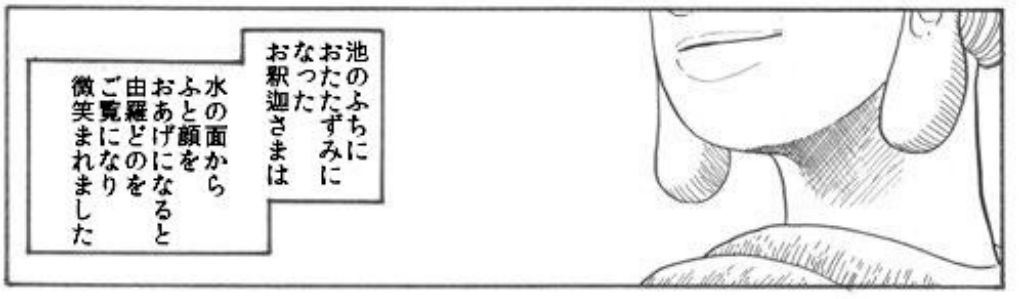
由羅物語

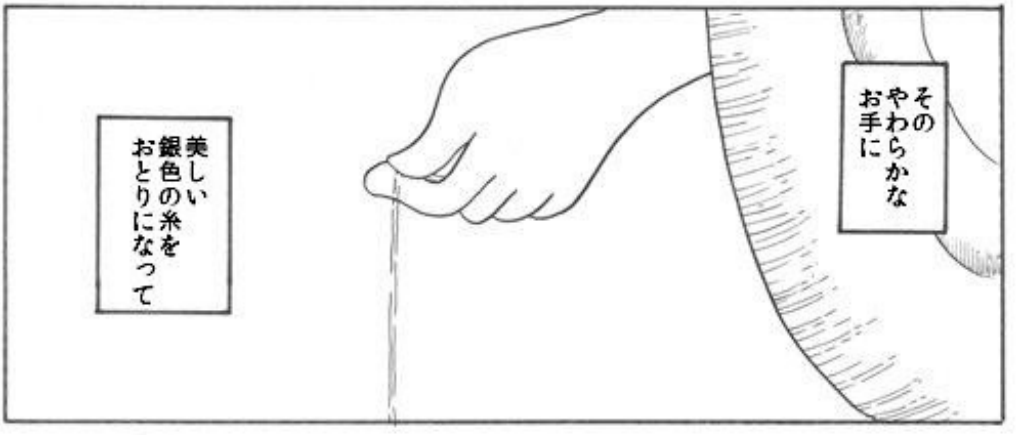
第弐話　お釈迦さまと人もの糸

明


ある日のことでございます
極楽のはす池のふちで

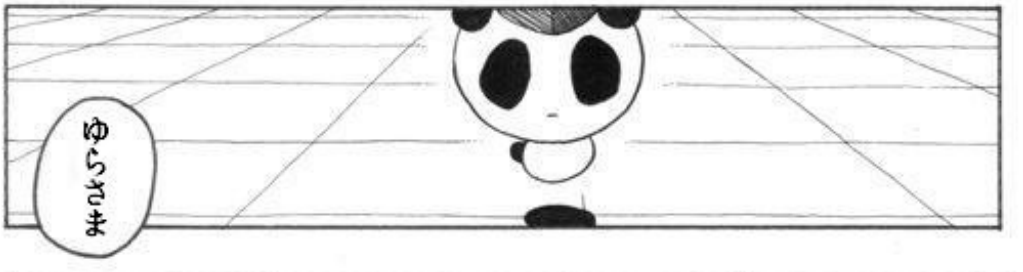
由羅どのはお釈迦さまに遇われました

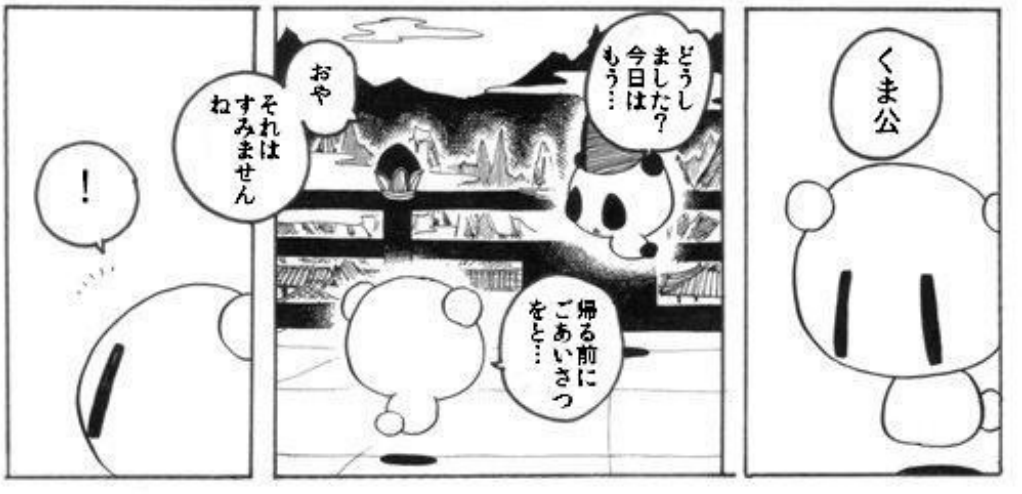

池のふちにおたたずみになったお釈迦さまは
水の面からふと顔をおあげになると由羅どのをご覧になり微笑まれました


そのやわらかなお手に
美しい銀色の糸をおとりになって

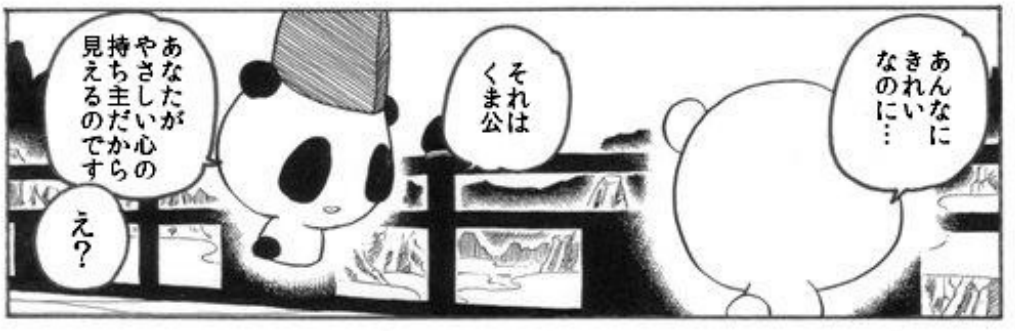
お釈迦さまのおおろしになったくもの糸は

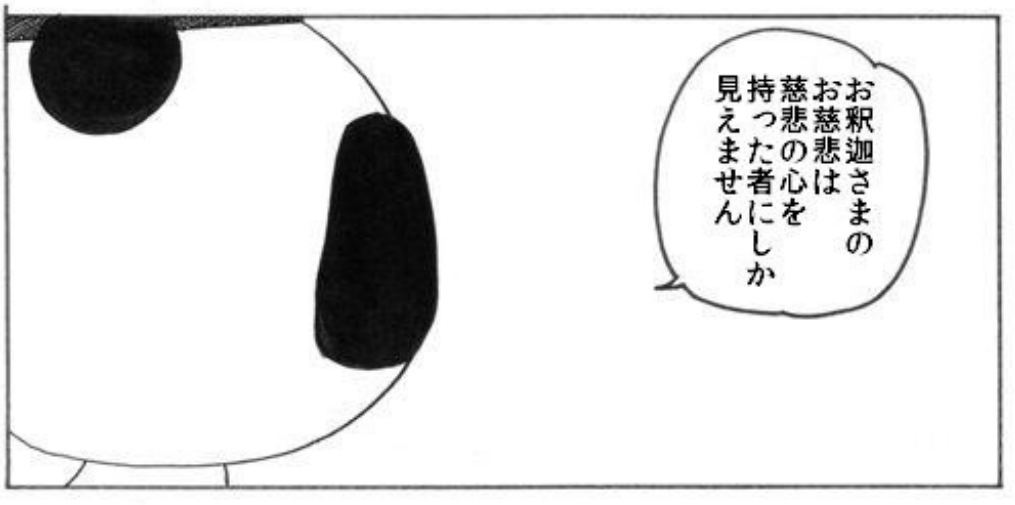
はるか下にある地獄の底へまっすぐにたれてまいります

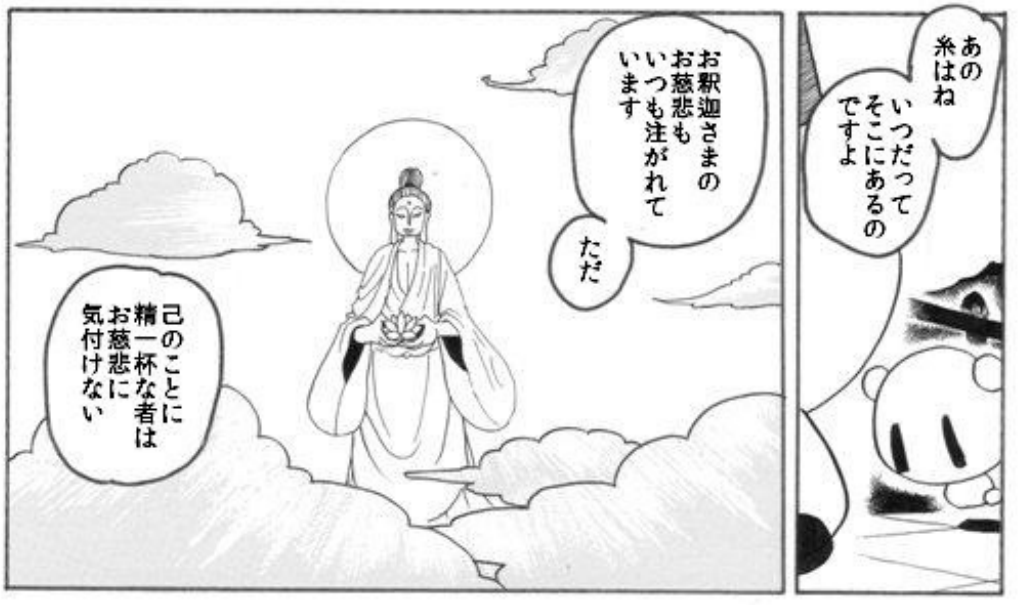




お釈迦様の糸ですか？
ええ お釈迦さまのお慈悲です
…なぜ
誰も気づかないのでしょうか…


あんなにきれいなのに…
それはくま公
あなたがやさしい心の持ち主だから見えるのです
え？


お釈迦さまのお慈悲は慈悲の心を持った者にしか見えません


あの糸はね
いつだってそこにあるのですよ
お釈迦さまのお慈悲もいつも注がれています
ただ
己のことに精一杯な者はお慈悲に気付けない

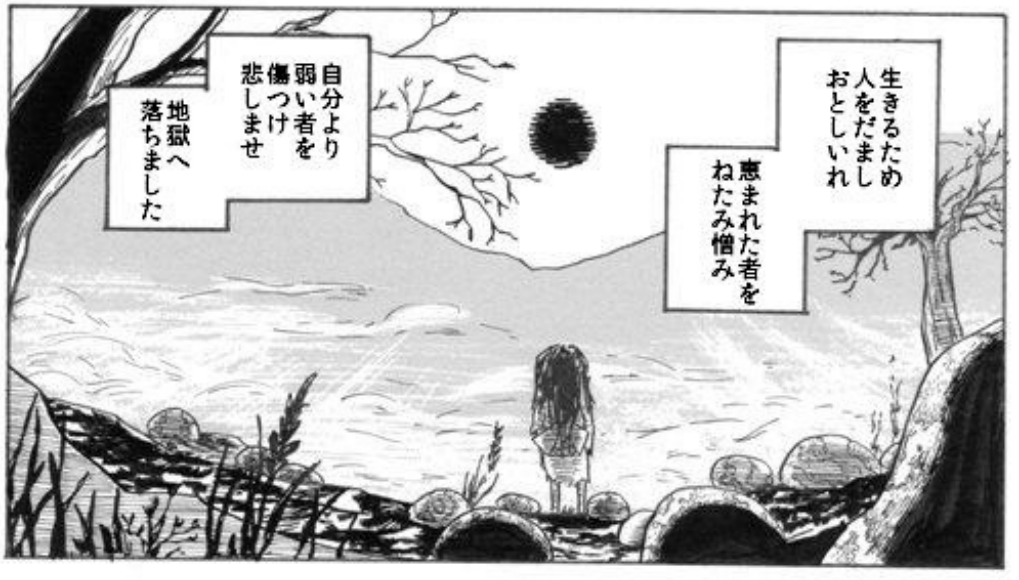
肉体の眼でなく
心の眼でなくては

心の眼…？
おや
ご覧なさいくま公
誰かが手を伸ばしましたよ

それは

小さな少女は
己の名も忘れた

一人の少女でした


生きるため人をだましおとしいれ
恵まれた者をねたみ憎み
自分より弱い者を傷つけ悲しませ
地獄へ落ちました

彼女の生前にした善業と云えば

たまたまいつもより多くの糧を得

たまたま出会った母子に亡き人の面影を見て

小さなおにぎりをあげたことでした

しかし

そのささやかなおにぎりがどれほど貧しい母子を喜ばせたことでしょう

たとえ少女にとっては
ほんの小さな偶然と
気まぐれに
すぎなかったとして

幾日も
口にしていない幼子に
どれほどの光を
与えたことでしょう

その様子をお釈迦さまは

しかと見ておられました

やがて
少女は絶え
地獄へ落ち

輪廻を
くりかえし
くりかえし

そして
ようやく
思ったのです

地獄も
餓鬼も
修羅も
畜生も

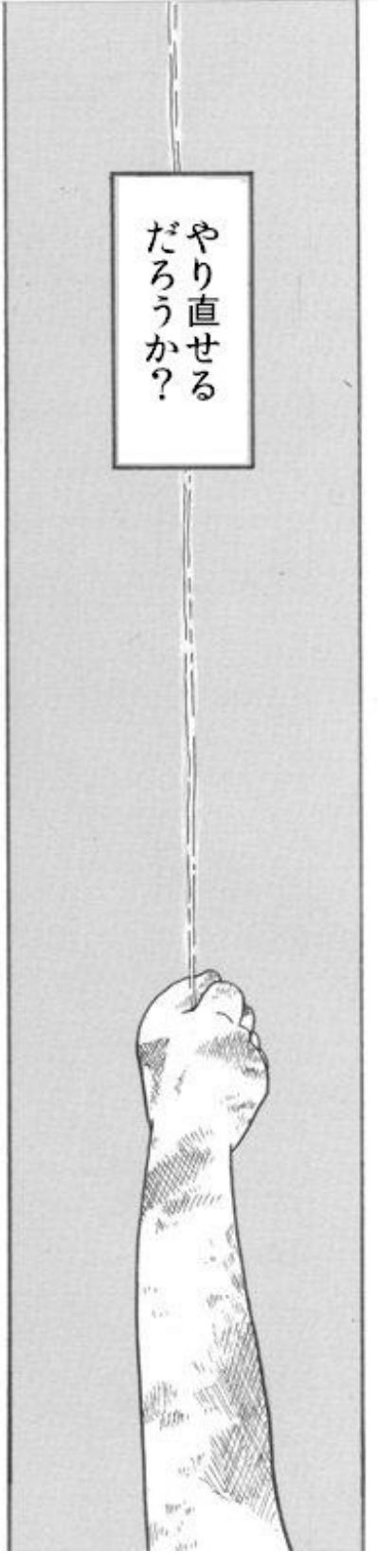
すべて
私だ

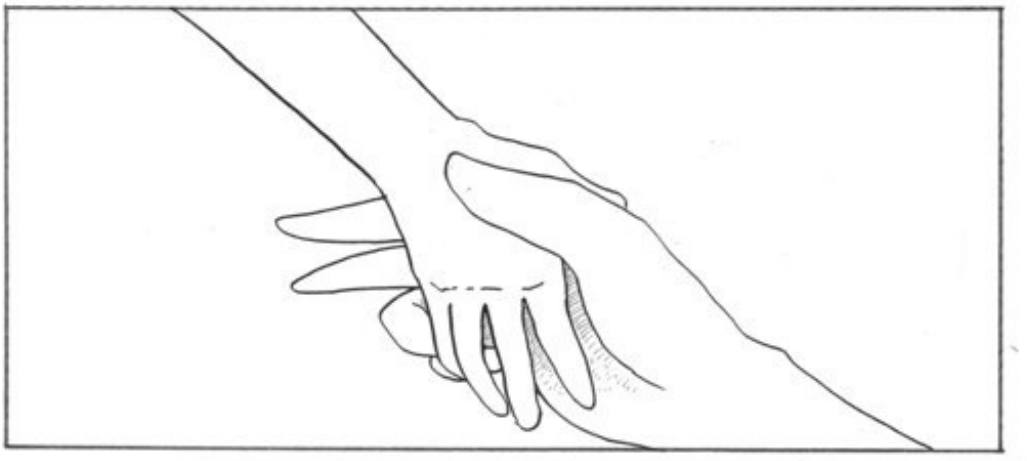
人をおとしめ
ねたみ傷つけ
盗み苦しめて
己のことばかり
考えて生きた

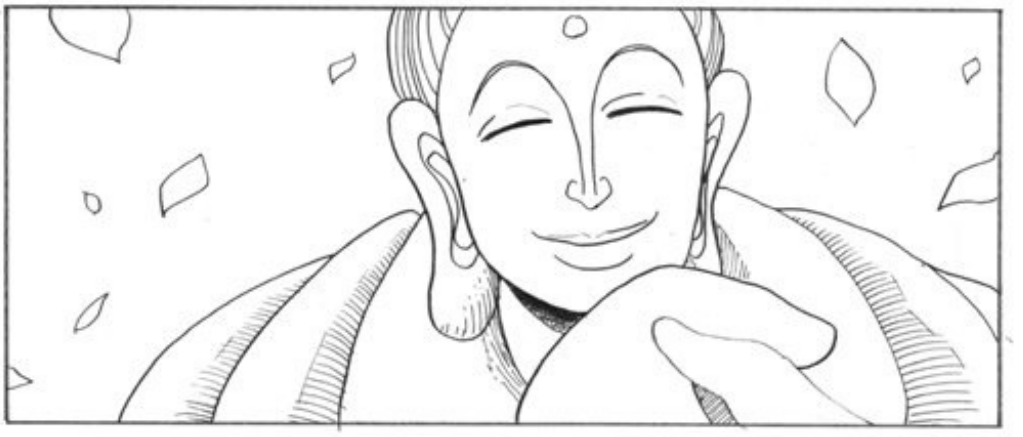
私の罪だ

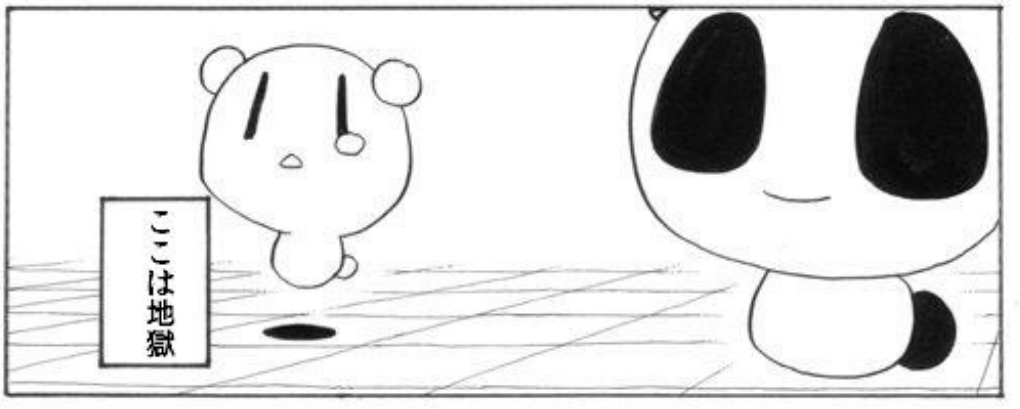
そうして
罪を思うとき
あの母子の姿が
思いだされる
のです

もしまた
人として
生きることが
できるなら


やり直せるだろうか？







なれば
慈悲は一層
深く注がれん

闇深ければ
光は
また明るく

来世に
思いをよせて
こんな物語が
つむがれることも
ございます

『由羅物語』

第弐話　お釈迦さまとくもの糸

〈完〉

参考・引用：『くもの糸』　著・芥川龍之介